

連載
88再び、遊びの世界の方言
その1

昔の遊びの思い出話から

A ユキア キエテ ヌクトナツテクル
ト オンミヤサンガ オモナ アソビ
バヤツカモシレンノー オトコワ(雪
が消えて暖かくなっていると、神社が主
な遊び場だったかもしれないね、男は)
B ウララ ヤツパ オテラヤ(私たち
はやはりお寺だ)。

C オジャミ ツクッテ アノ カイ
ダンノ トコデ オジャミオ シテ
アソブトカ ソーユーコト シテ フ
ユン ナルト アソンドツタシー(お手
玉を作ってお寺の階段の所でお手玉を
して遊ぶとか、そういうことをして冬
になると遊んでいたし)。

(中 略)
D ワタシラノ トキヤ コンナ パー。
ジュングリコンニ シテ コンナ
パーオ コレオ アタマニ グルグル
シテ アブラ ツケテ コンナ シタ

エ クルレント ナカエ ハイッテク
ルト トレルガヤ(私たちの時はこん
な面子。順番にして、こんな面子を、こ
れを頭にぐるぐるこすって、髪の毛を
つけて、このように下にくるんと中に
入っていると取れるんだ)。

(中 略)
A ソレト ジテンシヤノ リム。アレオ
ジテンシヤノ イッテ フルシーガ
モロテキテ ホイテ タケノボーデ
コヤツテ オシテアルイテ ウンド
バデ モーテアルクカンノ。ソナナケ
ナ ゴッスンクギ ウチカラ モッテ
デテ ホシテ コヤツテ サイテワ
スージ ヒーテ。ジントリツテユーカ
ソーユコト シタモンジャワイ。(それ
と自転車のリム。あれを自転車屋に
行って、古いものをもらってきて、そし
て竹の棒でこうやって押して歩いて運
動場で回って歩くかね。そうでなけれ
ば五寸釘を家から持ってきて出して、そし
てこうやって刺しては線を引いて。陣取
りというか、そういうことをしたもの
だよ)。

(以下 略)

〔注A〜Dは大正生まれの4人の話し手の略
号。A・Dが男性、B・Cが女性。方言の片
仮名表記の後の()内が共通語訳。(加藤
和夫「石川県小松市符津町方言の自然談
話」『小松市立博物館研究紀要 第36集』
2000年3月より抜粋)〕

右の方言談話は1998年8月2日に
符津町で収録した30分余りの談話を文字
化したものの一部です。4人の方が、昔の
遊びを思い出しながら、懐かしそうに、楽
しそうに話しています。時代が変わり、子
どもたちの遊びも変わりましたが、中に
は昔の遊びが受け継がれているものもあ
ります。

遊びの世界の方言については、本連載
開始直後の1998年5月から7月
にかけて、「肩車」(雪渡り)、「片足跳び」の方
言、1999年9月に「面子」、2000年
3月に再び「雪渡り」の方言の市内の分布
を取り上げたことがあります。次回か
ら改めて、市内で聞かれる(聞かれた遊
びの世界の方言を見ていきたいと思います。
す。

連載
89再び、遊びの世界の方言
その2

女の子の遊びから

暑い毎日です。前号で紹介した方言談
話や写真にも登場したオジャミなど、女
の子の遊びの方言からまず見ることにし
ましょう。

オジャミは言うまでもなく「お手玉」の
ことです。『日本言語地図』(国立国語研究
所)で「お手玉」の方言の全国分布を見ると、オジャミは近畿地方から中国・四国・
九州地方にかけての西日本に広く分布し
ます。北陸地方では、福井県の嶺北地方か
ら、小松を含む石川県加賀地方と、それに
続く富山県西部に分布が見られます。市
内では、オジャミの発音も聞かれました。
オジャミの袋には小石や小豆(あずき)を入
れ、片手で2個以上、両手では3・4個使っ
て遊んだとのこと。

オハジキはハジキとかハジキイシとも
言います。最近のようなガラスのきれいな
「おはじき」などなかったころは、小さく

平べったいきれいな石を探してきて、そ
の小石を手の甲に乗せて投げ、手の平で
受け取るような遊びをしたと聞かまし
た。

「あやとり」はチドリです。チドリ以外
では大杉でモンドという言い方も聞かれ
ました。チドリオ トル(あやとりを取
る)、チドリデ アソボ(あやとりで遊ぼ
う)のように言い、太めの糸を使って、川
や山、ビブラ(熊手の方言)など、様々な形
を作って遊んだものです。主に女の子の
遊びではありましたが、筆者も小さいこ
ろはやった記憶があります。

遊びの鬼を決めるにはアイケン(じゃん
けん)で

「かくれんぼ」やオニツコ(鬼ごっこ)の
ことをするときには鬼が必要で、その鬼
を決めるのに使われるのが「じゃんけん」
です。ほかにも物事の順番を決めたり、
グループ分けをするときなどにも使わ
れます。小松市では「じゃんけん」をアイ
ケンなどと言います。「相拳」の文字があ
てられるのでしょうか。アイケンの掛け声

は、アイケン ポイ(同じ時は、アイコデ
ホイ)です。面白いのは、「ぐー・ちょき・
ぱー」にあたるアイケンの三つの手の呼
び方です。大杉ではイシ・ハサミ・ヘラ、尾
小屋ではグー・カイ・パー、符津ではグー・
ハサミ・パーが聞かれ、市内でも色々違い
があります。読者の皆さんの集落では何
と言っていたでしょうか。

遊びの中断はイップク

遊んでいる途中に、トイレなどに行き
たくなつて遊びの中断を頼むとき、皆さ
んは何と言ったでしょうか。共通語的に
はタイムなどの言い方が聞かれますが、
筆者は子供のころ(福井県武生市)「ミッキ
と言っていました。これまでの調査では、
小松市内ではイップクという言い方を聞
きました。チョット イップク シンカイ
(ちょっと一休みしようよ)、イップク シ
ヨーサー(休みしようよ)などと言い、
遊びを終えるときには、オーイタ(やめ
た)、モー オコサ(もうやめようよ)と
言っていたそうです。このテーマは次回に続
けます。

連載
90再び、遊びの世界の方言
その3

長い夏休みが終わりました。普段は仕事に忙しいお父さん、お母さんたちの中には、夏休み中、子どもの相手で久しぶりに懐かしい遊びを体験した方もいらっしゃるのではないのでしょうか。今回もそんな〈遊び〉の方言を続けます。

主に男の子の遊びから

主に男の子がやった遊びに「面子^{めんて}」があります。筆者も小学校の頃は、丸いボール紙に絵を描いた紙面子（小さいサイズと大きいサイズがありました）をおもちゃ屋で買い求め、近所の友達と面子遊びをよくやりました。遊び方は何種類もありましたが、一番よくやったのは、地面や室内の床に置いた相手の面子めがけて自分の面子をたたきつけ、その風圧で相手の面子をめくり、めくれたら自分のものにするというものでした。あまりに熱中しすぎて、右の肩を腫^はらして親に叱られたのも今となっては懐かしい思い出です。

が、最近の子どもたちは面子そのものを知らない子が多くなりました。筆者の郷里（福井県武生市内）ではパシンと言っていました。が、小松市内では、マルウチ、マル

ケン、パス、パッチ、カッタなどの多彩な方言が聞かれました。マルウチ、マルケンの類は面子の丸い形から、パス、パッチ（筆者のパシンも）の類は面子をたたきつけた時の音から、カッタは「かるた」からと考えられます（詳しくは連載1999年9月号参照）。

筆者が小学校高学年のころ、冬の学校の教室で（もちろん休み時間にですが）熱中した遊びがウマトビです。小松でもやはりウマトビが聞かれました。二つのグループの片方のリーダーが壁を背に立ち、その子の股にかがむように頭を入れ、その子の股にまた次の子がというように次々とつながって馬を作ります。片方のグループがその馬に次々と飛び乗り、リーダー同士がアイケン（じゃんけん）をして、その勝ち負けで馬が交代する（それまでに馬がつぶれても負け）という、今から思えばかなり乱暴な遊びでした。

餓鬼^{がきだいしょう}大将の男の子たちがやったものといえば「通せんぼ」があります。符津でバンシヨという方言を聞きました。「通せんぼをする」ことはバンシヨースルとも言ったようです。バンシヨは「番所」からと思われますが、遊びというよりは意地^{いぢ}悪に近いものだったのででしょうか。

男の子の遊びと言えば「鉄砲」類もあります。市内で聞いた種類としてはスギデッポー（杉の実をメダケⅡ笹竹に詰めて、自転車のスポークで鉄砲のように勢いよく押し出して遊んだ、カミデッポー（同じくメダケに紙を嚙^かんで丸めて玉にして押し出して遊んだ、ミスデッポー（竹で手作りした）、キカンジュー（連続して音が出るものを手作りした）などがあります。昔の子どもはみんな、こういうものを手作りしたものです。

季節外れですが、男の子は冬に雪が積もると悪戯^{いたづら}で「落とし穴」を作ったものです。小松でもオトシアナと言う所が多いのですが、雪の多い大杉地区ではオチンコという方言を聞きました。

次回も〈遊び〉に関する方言を続けます。

連載
91再び、遊びの世界の方言
その4

10月と言えば美りの秋。福井の山村育ちの筆者にとっては、秋の山に分け入って栗を拾い集めたり、そう簡単には見つけられないはずもない松茸^{まつたけ}を求めて赤松の下を這い回^はったりというのが、遊びそのものだったようにも思います。そういう自然を相手に遊ぶことのできる場所で生まれ育ったことに今さらながら感謝したい気持ちになります。

では、今回も〈遊び〉の方言を取り上げます。

「えらび歌」の歌詞にも地域差が

目の前に欲しいものが二つ置かれ、どちらも欲しいけれど一つだけというときに、二つを交互に指さしながら、「どちらにしようかな…」と言葉を唱えたことがあるでしょう。この時の唱え言葉を「えらび歌」と言つことがあります。数年前に東京の某女子大の学生が卒業論文の研究で全国の「えらび歌」を調べたいとい

ので、その調査に協力したことがありますが、その結果からは全国に実に多彩な歌詞が分布することがわかりました。こういうものも、遊び（言葉遊び）の一つと言つていいでしょう。

皆さんはどのように言っている（言っていた）でしょうか。同じ小松市内でも、世代や地域によっても違いが見られそうです。家族のそれぞれの言い方を確認してみても面白いかもしれません。

筆者も数年前に金沢市内のある看護専門学校で「えらび歌」のアンケートをとったことがあります。その学校には、石川県内の様々な地域から学生が集まっていますが、その結果、実に多様な歌詞が集まりました。その中で、小松出身の学生が教えてくれた歌詞は次のようなものでした。

♪「どちらにしようかな、神様の言うとお
り、鉄砲撃つて3番目、1、2、3（串町）
♪「どちらにしようかな、神様の言うとお
り、鉄砲撃つてバンバンバン、1、2、3、
4、5、6、7、8、9、10（串町）
♪「どちらにしようかな、神様の言うとお
り、鉄砲撃つて3番目、1、2、3（串町）
♪「どちらにしようかな、神様の言うとお
り、鉄砲撃つてバンバンバン」（矢田町）

♪「どちらにしようかな、神様の言うとお
り、鉄砲撃つてバンバンバン、あのねのね
1番目からう番目、1、2、3、」（大野町）
前半の「どちらにしようかな、神様の言うとお
り」までは共通ですが、その後が微妙に違っています。小松近辺では次のようなものもありました。

♪「どちらにしようかな、天の神様の言う
とおり、鉄砲撃つてドンドンドン、さわ
やかなコカコーラ」（旧能美郡寺井町）
♪「どちらにしようかな、神様の言うとお
り、鉄砲撃つてバンバカバン、もひとつ
おまけにバンバカバン、グリコ、柿の種」（旧松任市）

金沢市内でも、♪「どちらにしようかな、天の神様の言うとお
り、鉄砲撃つてバンバンバン、太鼓打つてドンドンドン、赤
とんぼ白とんぼ」という長いものをはじめ、まるで校下（校区・学区）ごとに違っている
のではと思えるくらい多彩ぶりでした。

「えらび歌」が基本的に子どもたちの世界のものだからこそ生まれたバリエーションなのではないでしょうか。

次回も〈遊び〉の世界の方言を続けます。

連載
92再び、遊びの世界の方言
その5

先月は、遊びの中でも、言葉遊びとしての「えらび歌」を取り上げましたが、今月はまた一般的な遊びの世界の方言に話を戻して、小松市内で生活語・調査を行った地点で聞かれたもののうち、これまで取り上げなかった遊びの方言をご紹介します。

大杉町の遊びの方言

村の中にある「遊び場」は発音が少し変化したアソツバという言い方が聞かれました。遊びの中には、「鉄棒で一回転する遊び」を言うチンククリ、「隠し芸のようなことをさすシンガイ」、「駆けっこ」をさすハシリキョーソー（走り競争）、「手つなぎ鬼にあたる鬼っこ」を言うオイコミ（追い込み）などがありました。このうち、シンガイは、「へそくり金」のことを小松でシンガイジエン（新開銭）と言いますから、江戸時代の隠し田（新開田）に由来する「隠し事をする」意味の「しんがい」

る」から「隠した芸」の意味合いでシンガイと言ったものでしょう。女の子が遊んだニンギョ（人形）を、チヨゴとかチョーゴモンとも言ったようです。

尾小屋町の遊びの方言

「遊び場」はアソンバという言い方を聞きました。大杉とは微妙に違います。「駆けっこ」はヨードンでした。ヨードン、ショーカ（駆けっこをしようか）と言うわけです。「腕相撲」はウデクミ、「謎々遊び」はアカシモンです。約束をするときの「指切り」はユビキリカミキリ、「仮の勝負」のことはタダです。イマ シルガ タダヤゾ。コレカラ ホントヤゾ（今するのは仮の勝負だぞ。これからが本当の勝負だぞ）のように言ったようです。水関係の遊びでは、「川で泳ぐこと」をカワオヨギ、マイナス評価的な（いたずらな）「水遊び」をミズチヨンゴ、「泥あそび」をドロチヨンゴと言いました。富山の置き薬屋さんが置いていつてくれたような「ゴム風船」はフクレンボです。縄跳びをしている人への掛け声として、「ホラトベ ソラトベ」とい

うのも聞きました。

符津町の遊びの方言

「遊び場」は尾小屋と同じアソンバです。「泳ぐ」ことはアベル、アビルです。カワデ アベル（川で泳ぐのように言います。泳ぎ方ではガメオヨギというのを聞きました。ガメ（亀）のように手足をもがくように泳ぐ泳ぎ方をさします。「謎々遊び」はナツカケアソビ、「仮の勝負」はウソツゴです。

では最後に、小松の遊びの方言を今少し挙げてみます。

「おもちゃ」にチョーゴ、チヨン「モン、テゴズリ」、「独楽」にゴマ、「相撲の五人抜き」にトビツキなどがあります。「遊びの仲間に入る」ことをマジルと言ひ、入れて欲しいときにはマイテと言ひます。一方、「遊んでいる仲間から外す」ことをハネダスと言ひ、「仲間はずれ」のことはハネウマ、ハネダシモン、ハネダシなどと言ひました。

連載
93

住居に関する方言 その1

今年もいよいよ師走を迎えました。年賀状のこと、ボーナスのこと、忘年会のこと、クリスマスのこと、人それぞれにいろんなことが気になり始める時期でもあります。

そんな中で、正月を前に年末の大掃除のことが気になる人もいるでしょう。筆者が小学生のころは、実家にまだ囲炉裏がありましたので、年末の仕事の一つは囲炉裏の煙で黒くなった壁や天井の煤（すす）払いでした。鼻の中まで黒くなって、決して楽な仕事ではありませんでしたが、普段はあまり見ることのない天井に近い場所をのぞき見るような楽しみもありました。筆者の郷里（福井県旧武生市）では、「煤払い」をススバキと言っていました。「煤（すす）＋掃（は）き」の意味です。

今月からは、そんな住居に関する方言について、小松市内の方言の例を見ていくことにします。

家、そして家の中の場所をさす方言あれこれ

まず、「家」のことはイエよりもウチと言ったのが一般的です。国立国語研究所編『日本言語地図』で「家」の方言の全国分布を見ると、北陸地方、中部地方、関東地方にウチが集中して分布し、その両側をイエが取り囲むように分布しています。その分布状況（こういう分布をABA型分布とか周囲分布と言います）から、日本語では、イエの方が古い言い方で、後にウチが発生したと考えられています。

家の入口の「玄関」はゲンカ、ゲンクワン、またはハイトなどと言われます。中でも、ゲンクワンのクワという発音は、加賀地方でも最近ではめったに聞かれなくなった合拗音と呼ばれる古い時代の発音の名残です。平安時代に中国から漢字音として伝わり、日本語に定着した発音です。現代方言としては、高年層で東北の青森・秋田、新潟から北陸の富山・石川、そして四国の徳島・九州・沖縄などに分布しましたが、全国的に衰退が著しく、消滅の危

機に瀕している発音の一つです。

玄関を入ると二フと呼ばれる土間があります。現在では、二フというと家の前や裏に植木などを植栽した「庭」をさすことになりましたが、本来は、北陸地方を含む日本幅広い範囲（関東地方と中部地方の一部は除く）で「玄関を入った土間」をさしていました。

二フから囲炉裏があった居間に上がる所については、符津でアガリクチ、尾小屋でハマイカという言い方を聞きました。囲炉裏があった居間（板の間）のことはオエなどと呼ばれます。筆者の郷里でも土間をさす二フは同じで、囲炉裏のあった板の間は、ちよつと発音が異なるオユエでした。囲炉裏のことは、大杉や丸山、花立といった山間部でジロが聞かれました。ジロというのは、白峰を始めとする白山麓に連続した分布が見られます。これら以外の地域ではイリリ、イロリなどが一般的です。

次回は、家の中の部屋の名前などから始めて、さらに（住居に関する方言）を続けます。

連載
94

住居に関する方言 その2

あけましておめでとうございます。

今年も引き続きさまざまなテーマで小松の方言をご紹介します。いきなりと思ってしまう。

前回の最後の方で紹介した、囲炉裏のある板の間をさす方言「オエ」に続いて、今月は、まず家の中の部屋や場所をさす方言から見ることにします。

家の中の部屋や場所の方言

「台所」をカッテバとかナガシバ、ナガシなどと言います。

カッテバは「勝手場」でもともと「調理に便利な、勝手のよい所」という意味で使われた「勝手」に由来するようです。今でも、共通語的に台所のことを「お勝手」と言ったりします。カッテバデ チャワカス(台所でお茶を沸かす：符津)のように使われます。ナガシバ、ナガシは「流し場」「流し」です。文字通り、食器や食べ物を洗い流す場所ということでナガシと呼

ばれたものでしょう。

カッテバ、ナガシバ、ナガシなどと呼ばれた「台所」にあった炊事用の「かまど」は、ヘツツイ、ヘツツイサンなどと言います。

以前は、食事をするカッテバの脇に木の扉付きの食器を入れる棚がありました。符津ではそれをフンダナと言っていました。フンダナはフロダナが変化した形です。この場合のフロは、入浴するための「風呂」ではなく、もともと漆器を入れて乾かす箱をさした「風呂」が食器棚に近いものをさすようになったと考えられます。では、入浴するための「風呂」というと、フロバ(風呂場)です。

家の中にあつた梯子状の階段は、ハシゴダン、ダンバシゴなどと言っていました。そのハシゴダンを使つてのぼつた中2階を尾小屋ではアマと言ったりもしました。アマでは藁仕事などをしたようでした。ただ、同じアマでも符津では、2階の天井部分をさすとの説明が聞かれました。アマガ ススケタ(天井が煤けた)のように使つたようです。

話は戻りますが、囲炉裏のあつたオエの天井には、囲炉裏で焚いた煙を出す場所がありました。それをケムリダシとかケムリヌケなどと言いました。

家の中心の太い柱、いわゆる「大黒柱」は、尾小屋でゴテバシラ、符津でダイコクバシラという言い方を聞きました。ゴテバシラは「ご亭柱(亭主、主人の柱)」の意でしょう。

便所の方言に古語が残る

ところで以前は、大便是家の中ではせずに屋外にあつた大使用の便所小屋でしたものです。その便所小屋のことを大杉でセンチャゴヤ、尾小屋でガンシヨと言っていました。センチャゴヤのセンチャは「雪隠」、ガンシヨは「閑所」という、ともに便所をさす古い漢語に由来する呼び名です。

新年早々、便所の話で終わってしまい恐縮ですが、(住居に関する方言)は来月に続けます。

連載
95

住居に関する方言 その3

20数年ぶりの大雪です。平成8年から12年にかけての小松の方言調査で訪れた大杉地区、尾小屋地区、新丸地区などの山間部では、とりわけ雪の量も多いことでしょう。筆者も小学2年生の時に郷里(福井県越前市)で経験した38豪雪のことを久々に思い出しました。屋根の上に降り積もつた重い雪にも耐えられるように作られた北陸の住居の工夫とはどんなものだったのでしょうか。

住まいの中の道具類の方言

食に関する道具(「包丁」「スプーン」「陶磁器」「急須」「茶碗」など)の方言については、連載87回(05年6月号)で紹介していますので、ここでは、それ以外の住まいで使われる道具類の方言を取り上げます。

室内の部屋と部屋の仕切りの戸である「襖」はカラカミとも言いました。元来、中央語としても使われた言い方で「唐紙」の字があてられます。

「布団」はフトギと言いました。フトギのギを「着」の意味と解して使っていたのかもしれません。フトギの種類に、カケフトギ、ウフフトギ(掛け布団)、シキフトギ(敷き布団)、ナツフトギ(夏布団)などがありました。「枕」を大杉町ではマツガとも言つたようです。

ジブキとは「雑巾」のことです。「地拭き」の意味で、北陸三県に分布した方言です。カトー ジブキ シボレヤ(かたく雑巾を絞れよ)のように言い、「雑巾がけ」をジブキガケとも言いました。同じ掃除道具の「箒」は、発音が少し変化してホークケと言われました。ホークケには、タケボーケ(竹箒)、クサボーケ(草箒)、ヌイゴボーケ(尾小屋町ではニンゴボーキとも。脱穀の終わった稲藁の芯「ヌイゴ」で作つた箒)などの種類があります。「ちりとりに」は、ゴミトリ、チットリ(大杉町)が聞かれました。

囲炉裏や火鉢で使う道具の方言には、センバ、サントクがあります。センバは炭や灰をすくうのに使う、スコップを小さくしたような柄のついた金属製の道具、

十能のことです。サントクは囲炉裏や火鉢で金や薬缶をのせるために置いた三本足の金属製の道具の名前です。囲炉裏と言えば火を使う場所。火をつけるのに使うマッチには、日本にマッチが普及し始めたころに呼ばれた「早つけ木」に由来するハヤツケン、ハイツケンという言い方が聞かれました。

「鍵」のことはジョーと言いました。ジョー カケル(鍵をかける)、ジョー シトケヤ(鍵をかけておけよ)のように言います。これもカラカミと同じで、元来、中央語でも使われていた「錠」(主に南京錠のような種類)に由来するものであり、新しく「鍵」が共通語として普及したために、古い言い方のジョーが方言と意識されるようになったものです。

夏の強い日差しを避けるための「簾」はヒヨケ、スー(簾)からなどと言います。ヒヨケは言うまでもなく「日除け」からです。

来月も(住居に関する方言)を続けます。

連載
96

住居に関する方言 その4

厳しい寒さに見舞われた今冬もようやく終わりを告げようとしています。ここしばらくの暖冬傾向で忘れていた雪国の春の喜びが何倍にも感じられる3月になるのではないでしょうか。

重く冷たい雪にじつと耐えた雪国の住居。その住居に関する方言を今月も続けます。

囲炉裏ざめいの座名の方

かつての住居と言えば忘れられないのが囲炉裏の存在です。筆者の実家にも才ユエ（小松では才エなど）と呼ばれる板の間に小学生の頃まで囲炉裏がありました。今は上に床板を張ってふさいでしまいましたが、時にくすぶる煙に目を痛くしながらも、家族が囲炉裏の周りに座って暖をとった冬の風景が懐かしく思い出されます。

囲炉裏の方言には、昨年12月号でもご
 紹介したように、市内山間部に白山麓と

連載
97

民俗と方言 その1

今年も卯月4月を迎えました。本連載も今月からいよいよ9年目に入ります。

前回は「住居に関する方言」の最終回として、囲炉裏の座名の方言をご紹介しました。従来、このようなものは地域の民俗として取り上げられることも多いものです。というわけで、今回からしばらくは、小松の民俗と関係の深い方言を見ていきたいと思います。なお、今回から取り上げる方言は、市内符津町での調査結果を中心としたものです。

年中行事にまつわる方言

マユダマは養蚕業の正月のお祝いです。戦前、養蚕が盛んなころに行われました。柳の木や竹にマユダマ(繭玉)をまねた餅、さらに小判型や打出の小槌の飾り物などを下げ、家の大黒柱に付けました。エビスコーは繊維業関係者の正月のお祭りです。女工さんに饅頭やキンカトー(「金花糖」。砂糖菓子の一種)を配ってお

同じジロ、そのほかの地域でイリリ、イロリが分布しますが、今回は囲炉裏の周りの四つの座名について見ることにします。住まいから囲炉裏が消えたことで忘れ去られようとしている方言です。

囲炉裏の四隅の座の中で最も重要な場所が、玄關から見て奥にあたる座です。そこは家の戸主の指定席でした。全国的にはヨコザの名が広く使われていましたが、小松ではムコザ、ムコザが一般的で、これは北の辰口や寺井（現能美市）と同じです。ムコザは「婿座」、ムコザは「玄關から見て」向こう座の意味と解している人が多いようですが、地域によつてはオトコザの名もよく聞かれることから、前者、つまりその家の主人となる「婿の座」の意と考えた方がよいでしょう。

そのムコザ(ムコザ)の両脇の座は、一般に、台所に近い方には家の主婦が座り、その向い側に客や戸主以外の男性が座りました。ですから、地方によってはこの二つの座を別の名で呼ぶ場合も多いのですが、小松市内では、やはり辰口などと同様に両方を区別せずヨコザと呼ぶとこ

るがほとんどです。例外としては、尾小屋で主婦の座る方をヨコザ、他方をゴテザと呼び分けていました。これは、本来、ムコザにあたる座をヨコザと呼んでいたのが（この座だけ莫座もざのような敷物を横向きに敷いたところからの名と言われている）、その語源が理解されなくなつてムコザという新しい名に取つて代わられたため、ヨコザのヨコが主人の座の「横」の意と解されて、文字通り両脇の座名に横すべりしたものと考えられます。

ムコサの真向かいの座はシモザ(下座)です。この名もまた辰口などと同じです。ちなみに、小松に近いところでは、手取川を隔てた川北町・旧鶴来町で、主人の座がヨコザ、両脇が座名なし、そしてシモザとなり、旧鳥越村で、ヨコザ・オトコイリ(客座)・タナマイ(主婦座)「棚前」の意か)・シモザとなります。

物がなくなつて言葉が消えることを「廃物廃語」などと言います。囲炉裏の消滅とともに、ここでご紹介した囲炉裏をめぐる方言も、遠からず人々の記憶の中から消え去る運命にあります。

5日をオトコノセックとも言ったそうです。

オヒガンは言うまでもなく春と秋の彼岸のことです。おはぎを食べたそうですが、昔は墓参りはお盆のときだけで、ヒガンにはしなかったとも聞きました。

オチユーゲンもお中元で言い方は共通語と同じです。7月に娘の実家から嫁ぎ先に、また仕事関係でお世話になった人に対する贈り物だったそうです。嫁がせう家は、鰯や河豚ふぐを開いて干したものを肴さかなとして酒といっしょに嫁ぎ先に贈ったとのこと。

ドヨ^{トヨ}は立秋の前の18日間、つまり「土用」のことです。今と同じように鰻を食べたり、7月25日過ぎには餅をついて食べたり、小豆餡^{あずきあん}を入れた餅を豆餅などといったしよに娘の嫁ぎ先に持っていくたそ
うです。

〈民俗と方言〉は次回に続きます。

連載
98

民俗と方言 その2

年中行事にまつわる方言(続)

前回に続けて年中行事にまつわる方言を見ていくことにします。

ドヨー(土用)が立秋の前の18日間を指すことはすでに触れましたが、梅雨が明けて天気の良い時期だからでしょう、ドヨーボシ(土用干し)をしました。昔は家中の部屋に衣類を吊って干したり、オミヤサン(神社)では祭りに使う幟旗などを干したりしました。筆者も子どものころ、この時期に父親と、普段しまい込んでいる掛け軸を広げてドヨーボシしたことを懐かしく思い出します。

8月と言えばお盆です。ですから8月のことをボンノツキとも言いました。符津では昭和40年ころまで、オボンには夜の7時半から8時ころから夜中の12時か1時ころまで盆踊りをしたそうです。村中の若者を総動員して、青年団が主催で太鼓を鳴らし、みんなで盆踊り歌を歌いな

がら踊り、特に8月17日の夜は踊りの輪が四重にもなるほどのぎやかさで、夜明けまで踊ることもあったと言います。

ニーボン(新盆)は、ある人が亡くなって初めて迎えるお盆のことです。葬式が終わった後の遺骨をニーボンの間際にお墓に納めてお坊さんにお経をあげてもらったそうです。ちなみに、小松ではニーボンですが、全国各地では「新盆」のことをハツボン(初盆)、シンボン(新盆)、アラボン(新盆)など、いろんな言い方をします。

夏の行事にムシオクリ(虫送り)があります。夏に各家々で2メートルほどの竹や薪などを束にして松明を作り、それに火をつけて太鼓をたたきながら田んぼを歩き、その火に虫を集めて殺す行事です。今のように農業などがない時代の素朴な害虫退治の行事です。符津あたりでは、木場潟の広場に松明の残りを集めて篝火をたくように燃やしたそうです。

真宗王国の北陸地方に広く普及している行事にホンコサンがあります。「報恩講さん」の発音が変化した形です。ホンコサ

マと言う集落もあります。親鸞上人に報恩感謝の気持ちで行うお寺の行事で、10月になると各お寺で始まるそうです。

アキヤスミは、秋の稲刈りが終わったあとに村全体で一斉にとる休みのことです。ヤスギョと言う集落もあります。仕事を休んで餅をついたり、おはぎを作ったりして食べたと言います。

シチゴサンはもちろん11月の「七五三」のこと、ハリクヨー(針供養)は12月の行事です。ハリクヨーは和裁や洋裁をやっている人がした行事で、饅頭やこんにやくなどに折れた針をサイテ(刺して)お寺に持っていき、お経を上げてもらったそうです。

師走もオートシ(大晦日)が近づくとき、家でススハライ(煤払い)が行われたものです。昔は囲炉裏でも風呂でも竈でも薪を燃やしたので煤がたまり、それを竹の棒に縄を切った道具で落としました。大杉ではススハキ、尾小屋ではススバライとも言いました。そして、ポチツキ(餅つき)をして新年を迎えることになりました。

次回も「民俗と方言」を続けます。

連載
99

民俗と方言 その3

前回まで2回に分けて年中行事にまつわる方言を見てきましたが、今月は「民俗と方言」に関する新しい話題を取り上げます。

神仏に関する方言

カミサンとは、夫が妻のことを言うカミサン(余談ですが、以前NHKで放送されていた海外ドラマ「刑事コロンボ」の名台詞に「うちのカミサンが…」というのがありましたね)ではなく、「神様、神社の氏神様」のことを言います。尾小屋などのようにカンサマと言う所もあります。したがって、「神棚」のことをカミサンダナとも言います。そのカミサンを祀る神社はオミヤサンです。

カミサンに対して「仏様」のことはホトケサンです。幼児に向かってはマンマンちゃんという言い方も聞かれます。マンマンちゃんはいわゆる育児語です。マンマンちゃんのマンマンは、仏壇に供える仏飯

(ご飯)のことを言う幼児語・育児語のマンマ、あるいは、北陸に多い浄土真宗で仏様を拝むときに唱えるお経のナンマンダブ(南無阿弥陀仏)のナンマンに由来するものではないでしょうか。符津では、正月に雑煮を食べる前に、サー マンマンちゃん イツテキテカラ ゴハン タベルガヤソー(さあ、仏様に行ってきたからご飯を食べるんだよ)などと言って、先祖を拝ませたと言います。仏様のいる「仏壇」のことはオブツタン、ブツタンが一般的な言い方ですが、大杉でブツタン、尾小屋でオジョーダン(「お上壇」の意味。仏壇のある部屋もさします)というのを聞きました。

「寺」のことをオテラ、オテラサンなどと言い、「寺の僧侶」のこともオボーサン以外にオテラサンとも言います。

冠婚葬祭関係の方言

お祝いの結婚関係から始めます。

結婚が決まると結納を交わしますが、シメダイとは「結納金」のことです。結納のときの手打ち酒のことをイッショーザケ

(一升酒)といい、結納のこともさしたそうです。結納のお返しはユイノーガエシですが、符津あたりでは、相手の家からもらった酒樽や三方(供え物をのせる四角い台)の上のつた品物などを床の間に一定期間飾り、あとで三方などの道具を返すときに、生鯛や酒をつけてお礼に行つたと言います。鯛は2匹を腹合わせ(夫婦を意味する)にしたそうです。

「仲人」のことをカンサマ(神様と呼びます。大事な仲人を「神様」に見立てたわけです。ナカウドサン、ナコード、ナコードサンとも言います。「結婚(式)」はヨメドリです。もちろん「嫁取り」の意味です。「結婚すること」を、ミョート(メオト)ニナル、イッショニナルとも言います。「花婿」はムコサン、「花嫁」はヨメサンです。結婚式をすませて1週間目に実家に里帰りすることをナカガエリ(尾小屋ではナカモドリ)と言うそうです。

さて、次回で本連載もいよいよ節目の100回目を迎えますが、「民俗と方言」をこのまま続けます。

連載
100

民俗と方言 その4

平成10(1998)年4月の第1回から早いもので足掛け9年、本連載も今回で100回目を迎えることになりました。連載開始当時に比べると、ふるさと学習の気運の高まりもあって、最近では地域の方言がずいぶん見直されてきているように思います。共通語にはない方言の役割や魅力に注目が集まり、昨年から今年にかけては、『ちかつばめんこい方言練習帳』(主婦と生活社)をはじめとする若者向けの方言本も多く出版されています。昨年11月に筆者の監修で出版した『新 頑張りまつし金沢ことば』(北國新聞社)も、こうした方言ブームの中で予想以上にたくさん読者を得ています。本連載が、小松の皆さんにとつての方言再発見のきっかけとなれば幸いです。

冠婚葬祭関係の方言(続)

では、前回の後半で取り上げた冠婚葬祭関係の方言を今少し続けます。

連載
101

時間に関する方言

今年も暑い夏、8月となりました。連載も区切りの100回をこえて今回が101回目。また気持ち新たに、さまざまな小松の方言をご紹介します。今回は時間に関する方言を取り上げます。

年をとると時間のたつのが早いとはよく言われるところですが、筆者も最近はその実感することが多くなりました。小松では、「時間がたつ」ことを、トキヤータツと言ったりします。

今日を中心に昨日、一昨日、明後日などの方言

「今日」はキヨーですが、「昨日」のことはキンノです。キンノノアサは「昨日の朝」のことです。「昨日」のことをキンノという地域は、長野南部、静岡西部、愛知、岐阜に北陸三県、そして近畿地方の範囲に及びます。石川県内では、キンノのほかキンニョーという言い方も聞かれます。ま

村で人が亡くなると、オクワン(棺桶)に入れます。棺桶のことを大杉や尾小屋ではドバコとも言いました。「お通夜」のことはヨトギ(夜伽)からと言いました。棺桶は、以前は最近のような寝棺ではなく、真四角なオクワンに亡くなった人の膝を折って座らせて入れ、それをコシ(興)に乗せて4人でカイト(担いで)運び、村のヤキバ(火葬場)サンマイ、カソバなどともで燃やしました。骨拾いは翌日の朝に行つたそうです。

墓地のことをハカバ(墓場)と言います。ハカバにある墓石の上部方形部分をサオ(大杉ではドボ)と言います。

産育習俗と方言

〈民俗と方言〉の最後に、冠婚葬祭の「婚」と関連の深い産育関係の方言を取り上げます。

結婚して妊娠することを、デキル(子どもが)できる、ハラデコナル(お腹が大きくなる)、ハラニクル・オナカニクル(お腹にくる)などと言います。例えば、アニキントコ デキタサケーニ オイワイ

た、キンノの晩、つまり「昨晚」のことはヨンベ、ユンベです。

「昨日」はオトツイ、「昨日」はサキオトツイです。「昨日」の方言の全国分布を見ると、関東・中部地方から東にオトイ(東北地方を中心にオトイナも)、岐阜・愛知から西にオトツイという東西対立分布を示します。ただ、本来西日本方言の特徴を基礎とする石川・富山では、西のオトツイとともに東のオトトイも聞かれ、この地域がオトツイ勢力とオトトイ勢力の接触地帯であることがわかります。オトツイは「をとつひ」の形で古代の万葉集にすでに用例が見え、オトトイよりも古い形と考えられています。

次に、今日の翌日「明日」はアシタ、「明後日」はアサツテ、そして「明後日」はシアサツテ、さらにその次の日「明後明日」はゴアサツテです。ゴアサツテは、かつて北陸を含む西日本全域に分布したもので、最近では使う人はほとんどいなくなりましたが、シアサツテのシを4、つまりキヨー(今日)を基準の1として、アシタが2、アサツテが3だからシ(4)アサツテ

モツテカンナン(兄のところに子どもができたからお祝いを持って行かなければならない)のように言います。妊婦のことをニンプ以外にデンバラ(出腹)からとも言つたそうです。

そして、子どもが生まれることを、ネンネ デキルと言います。ネンネとは「赤ん坊」のことです。助産婦、以前のサンバサン(産婆)の古い言い方にトリアゲババー(取り上げ婆)があります。ババーですから、若い産婆さんには言わなかったのでしょうか、どちらにしても俗な言い方です。その産婆さんが、産後3日目に産湯を使いに来ることを、ミツカノオユ(三日のお湯の意)と言いました。また、出産後に嫁の親族が婚家に招かれてごちそうされることを、ネンネヨバレとかネンネンコヨバレと言いました。子どもをアヤスことを、オダテルとも言いました。子どもをおんぶするときに着る袖付きの綿入れ半纏はネンネコタンゼン、袖なしの綿入れ半纏はガメと言いました。

次回からは、また新しいテーマで続けます。

と解釈して、ゴ(5)アサツテという言い方が生まれたと考えられています。

朝から夜までの方言

「朝」はアサが一般的ですが、大杉では白山麓の白峰方言などに共通するアサギリという言い方が聞かれます。例えば、大杉では時間帯によって一日を、ヨアケ(午前4〜5時)、アサギリ(6〜7時)、ヒルマエ(8〜11時)、ヒラガリ(11〜12時の昼食前)、ヒンマ(午後0時ころ)、ヒンニヨマ(昼食後の昼寝時)、ヒリオリ(昼食後の時間、ヨサガタ(5〜6時半ころ。尾小屋でタツチとも)、バン、ヨサリ(7〜10時)、ネシナ(10時過ぎころ)、ヨナカ(12時過ぎ)のように分けて呼んでいました。ほかに、夜に対して日中のことを、ヒダナカ(ヒノナカとも)と言っていました。「今夜」はコンニヤ、「明日の朝」はミヨアサです。

次回も〈時間〉関係の方言を続けます。

連載
102

時間に関する方言 その2

遅い梅雨明けとともに猛暑に見舞われた8月でしたが、これをお読みいただくころには、涼しい秋風が吹き始めていることでしょう。

では前回に続いて、時間に関する方言を見ていきます。

「日おき」のイチニチハサミなど

「晩中」のことをヨドーシ(夜通し)と言います。ヨドーシ シャベツトツタ(一晩中、話していた)のように言います。

「日おき」の部分を小松の方言では、イチニチオキ以外にイチニチハサミとも言います。

「月末のことはゲツマツとも言いますが、ツキジマイという言い方もされます。

エマ(今)とその周辺

エマワ ヨイ ジダイヤ(今はよい時代だ)のように、「今」のことはイマの発

音が変化したエマも聞かれます。トーニオワツトルのトーニは「とくに」、ヤガテクルヤローのヤガテは「もうすぐ」の意味です。モトカラは「もともと」。昔からの意味で使われます。

「急に」の意味ではニワカニが使われます。ニワカニ オイデタ(急にいらっしやった)、ニワカニ トンデデル(急に飛び出す)のように使われるほかニワカノ オキヤクサン(急なお客さん)のようない方もされます。シエーテ コイ(すぐに来い)、シエーテ ヤレ(すぐにやれ)のシエーテは「急いで」を失敬する「の急いで」と同じで「すぐに、早く」の意味の副詞として使われている例です。「すぐに」の意味では、ほかに、ジキ ヘンジシ テモラエンカ(すぐに返事をしてもらえないか)のように、ジキジキニも使われます。

副詞の「早くも」に当たる言い方には、ハヤがあります。ハヤ キタガ力(早くも来たのか)のように使います。

ヘシネーって「遅い」「待ち遠しい」

一方、「遅い」とか「待ち遠しい」意味を表す方言に、ヘシネーがあります。アルクノガ ヘシネー(歩くのが遅い)とか、長く待ちくたびれて、ヘシネーナー(遅いなあ)のように言います。逆に約束の時間に間に合うことは、マニオーと言います。

「ものごとはじめ」のことをカカリと言ったことがあります。シゴトノ カカリ(仕事のはじめ)のように使われます。

イッ力は「何日」の意味です。イッカタツタイナ(何日経ったかな)のように使います。「七日」のことは、発音が変化した、ナヌカ、ナンカがよく聞かれます。「初七日」のことはシヨナヌカ、シヨナンカであり、1週間、2週間、3週間、4週間を、ヒトナンカ、フタナンカ、ミナンカ、ヨナンカのようにも言います。

次回は、〈空間〉に関する方言をご紹介します。

連載
103

空間に関する方言

今回は、〈空間〉に関する方言を見ていきます。最近になって本連載をお読みいただいている人はご存じないかもしれませんが、で説明しておきますと、連載55回目(2002年10月)以来ご紹介している方言は、小松市立博物館の委託で平成8年から12年にかけて実施した市内全域の方言調査のうち、大杉町、尾小屋町、符津町、安宅町、龍助町での生活語彙調査(約2,300項目)で得られたものです。

「後ろ」の意味のウッソー、ウラ

「前」と「後ろ」の「前」はマエですが、「後ろ」の意味では、ウシロのほか、ウッソー(尾小屋、符津が聞かれました。ウシロからの音変化形(ウシロ→ウッソー→ウッソ)でしょう。尾小屋、符津では「後ろ向き」をウッソームキとも言ったようです。珍しいところでは、龍助町で「後ろ」をウラとも言つ、との説明を聞きました。「後ろ」のことをウラなんて間違ひでは、と思

う人もいらつしやるかもしれませんが、実は全国的にも「後ろ」の意味のウラが、千葉、長野、京都など、点々と確認できます。例えば、家の後ろ側をオモテに対してウラと言ったりしますが、本来「裏」を表したウラが「後ろ」の意味でも用いられる可能性は十分あるのです。龍助町のウラは日常的にどの程度使われているものなのでしょうか。

「間」の意味のアイサ、アフシャ

人と人、物と物の「あいだ(間)」のことをアイサ(尾小屋)、アフシャ(尾小屋、符津、龍助)などと言います。このうち、アイサは「(時間的、空間的な)間」をさした古語「あい」に由来すると思われる、『日本方言大辞典』(小学館)によれば、アイサの形は、小松以外にも関東の栃木、群馬、そして新潟、長野、山梨、静岡、愛知、岐阜、富山、西の三重、滋賀、和歌山、島根、岡山、徳島、香川、熊本などの広い範囲に分布します。また、「ツクエト ツクエノ、アフシャ(机と机の間)」のように使われるアフシャも、「(時間的、空間的な)ものとも

のとの間、間隔、すきま」をさした古語「あわい」に由来すると思われる。「あわい」から、アフイサ↓アフサ↓アフサイ↓アフシャのような変化が推定されます。アフサイの形は、新潟・佐渡、富山、福井、岐阜・飛騨、滋賀、京都、兵庫、和歌山、島根など、近畿およびその周辺に分布が見えますから、小松のアフシャは、近畿から福井を経て伝播したアフサイが変化したものとみて間違ひないでしょう。

〈空間〉に関する方言としては、ほかに「周り」をさすグルリ(大杉、符津、龍助)、グルジ(尾小屋)、「玄関の外の家」の前の空間「をさすカド(大杉、尾小屋)」、「一番端っこ」をさすトツパナ(尾小屋、符津)、「中心から離れた端の方」をさすハナツバ(大杉)などがあります。尾小屋のグルジは、音声学的には、グルリの「リ」が発音の仕方が似ている「ジ」に変化した形と説明できます。

次回からは〈数量〉に関する方言をご紹介します。